

論文名：蒔絵螺鈿の成立とその展開-平安時代を中心として-

要旨：

日本の漆工史において、平安時代は素材・技法・表現の各面において著しい発展が見られる極めて重要な時期に位置付けられる。特に日本の代表的な漆工加飾技法である蒔絵の確立と盛行は、それまでの大陸製伝世品の模倣段階からしだいに脱却しつつあった当時の状況を端的に示している。平安時代の漆工制作の流れを追うことは日本の漆工史における転換期の動向を明らかにすると共に、日本独自の美意識の形成過程について広義的に考える上でも重要な意義を持つと言える。

奈良時代から平安時代にかけて制作された漆工品のうち、現存するものは極めて少なく、それらの素材や技法、構造的な特徴は既に多くの調査・研究の中で取り上げられてきた。その成果により、現在までに遺例 1 点 1 点に対する研究は深化してきたと言える。しかしその一方で、遺例間に見られる関係性を考察し、平安時代における漆工の潮流を概観するような研究については、あまり進展が見られない。その主な理由としては、現存する遺例の数がごく僅かであるとともに、それぞれが固有の特徴を有する傾向にあることが挙げられる。

平安時代における漆工表現のより具体的な動向や時代像を明らかにするためには、同時期の文献や絵画作例といった漆工品の周辺状況を伝える資料群に着目し、それらの包括的な収集・調査を行う必要がある。本研究ではこれまで調査の及んでいなかった資料に加え、既知の文献等についても一次資料に立ち返った精査を行うことで、先行研究において見落とされていた情報を整理し、実作例との比較による考察を試みた。本博士論文では特に平安時代後期に登場した漆工加飾技法である蒔絵螺鈿に焦点を当て、その具体的な成立時期や表現上の特色についての再検討を行っている。

蒔絵と螺鈿は、共に古くから漆工品の加飾に用いられてきた技法である。蒔絵は器物の表面に漆を塗り、その上に金属粉を蒔くことで絵や文様を表す加飾技法であり、平安時代に技法的に確立した。一方、螺鈿は夜光貝や鮑貝などの貝殻を板状に加工し、そこから文様を切り出して木地や漆地に定着させる技法であり、奈良時代に唐から伝えられた。蒔

絵螺鈿は蒔絵によって描かれた文様の中に螺鈿の文様が組み込まれることによって成立し、素材や工程の異なる2つの技法を併用した点において、平安時代の加飾表現の中でも特に画期的なものとなった。しかし現存する当時の遺例は、和歌山県の金剛峯寺が所蔵する《沢千鳥蒔絵螺鈿小唐櫃》と東京国立博物館が所蔵する《片輪車蒔絵螺鈿手箱》の2点が知られるのみであり、その実態には依然として不明な点が多く残されている。

本論文の構成は次の通りである。第1章、「蒔絵螺鈿の源流」では、まず大陸から各種の漆工技法が伝来する以前の国内における漆の利用状況を把握するために、縄文時代、弥生時代、古墳時代の代表的な出土品に見られる表現や技法の傾向について述べる。その後、古墳時代の末期に登場した夾紵棺や、飛鳥時代の《玉虫厨子》、奈良時代の正倉院宝物と、大陸の新しい技術や技法の到来を告げた事例について順を追って取り上げる。特に正倉院宝物については、平安時代に成立した蒔絵螺鈿技法の原点となる遺例群に注目し、同時期の出土品の例を踏まえながら、奈良時代の蒔絵技法及び螺鈿技法の諸相についてまとめる。

第2章、「文献上における蒔絵螺鈿の成立」では、まず平安時代の前半に制作された初期蒔絵に位置付けられる遺例群について、前章で触れた奈良時代の蒔絵との比較を行いながら、各作品に見られる漆工技法や表現上の特徴について取り上げる。それと共に、同時期に記された古記録や物語に登場する蒔絵の語が内包する意味とその問題について、各文献に見られる記載の傾向を踏まえながら考察する。その後、11世紀以降の文献に散見される蒔絵螺鈿の記述を網羅的に取り上げ、それぞれの語が示す加飾表現について現存作例との比較を通して検討し、蒔絵螺鈿技法の成立時期を示唆する具体例を提示する。

第3章、「東京国立博物館所蔵《片輪車蒔絵螺鈿手箱》について」では、蒔絵螺鈿に関する考察の集大成として、平安時代を代表する漆工品である《片輪車蒔絵螺鈿手箱》の技法及び意匠上の特徴について取り上げる。特に箱の外面に表された流水片輪車文については、蒔絵螺鈿技法による表現効果に加え、同時代の絵画作例や後世に作られた類例との比較検討を通して、図様の持つ意味や時代ごとの美意識の差について論じる。